

## 1けたをかける かけ算の筆算 そのポイント

### 1 何十・何百のかけ算

**A**

20・・・10が2こ  
20×3・・・10が(2×3)こ

例：20×3

いきなり、この考  
えに出会うと混乱  
する児童が多い。

**B**

- ① 瞬間に「にさんがろく」で60と、頭に浮かぶ。
- ② 20ではなく、なぜ2の段九九が瞬時に出てきたのかを整理させていく。
- ③ 2は、10の個数だ。

**A**の教科書表記に出合わせる前に、**B**のような直感を大切にしたい。2×3であっても、20×3であっても、200×3であっても、頭の中には2の段の九九が真っ先に飛び込んでくる。20段・200段の九九で処理しようとするせず、既習の2の段九九で解決しようとしていることを強烈に意識づけさせたい。

日々の授業展開において、最初から、整理された美しい表現（教科書表記）を与えて、論理的・数理的な解釈を迫る説明型の授業ではなく、スタートとしては、子どもの持つ感性・感覚・直観等を出させることが大切である。そして、そのよさをもとにしながら、丁寧に整理（算数的表現処理方法の獲得）させる授業展開でありたい。

（**B**の③の後に、**A**のように整理させる。）

### 2 (2けた)×(1けた)の筆算

既習である加法の場面において、①5+3 ②4+8 ③17+4 ④34+28 ⑤265+178・・・という展開を経験してきている。ここでは、1けた同士の2つの数の和が10より小さい場合、次に2つの数の和が10より大きい場合、そして2けたと1けたの数の和で繰り上がりのある場面・・・といったステップを経験させているのである。獲得した知識や技能をもとに、次に何を解決すべきかを考えさせる展開である。

本単元の教科書でも、①12×4 ②24×3 ③32×4 ④43×6・・・という学習材で展開されていくが、加法の場面のようなステップを意識させることが重要になってくる。

つまり、(2けた)×(1けた)の筆算の学習においては、①(何十)×(1けた) ②繰り上がりがない場面 ③一の位に繰り上がりがある場面 ④十の位に繰り上がりがある場面 ⑤一の位にも十の位にも繰り上がりがある場面・・・といったステップを子ども側から要求することを保障してほしいのである。

そうすると、今後・・・

□□	□□	□□	□□□	□□□	□□□
× □	× □□	× □□	× □□	× □□	× □□□
□□□	□□□	□□□□	□□□□	□□□□□	□□□□□

後は一緒!



「これ以上、けた数の多い筆算方法を学習することは必要ないよ!」